

ましたし、自治体から派遣された保健師や医師も健康相談など貴重な仕事をされてました。ただ、行政によって対応の差もありました。ファックス一枚で情報を流しているところがある一方で、村長さん自身が毎日避難所を訪問し、被災者と対話しているところもありました。障害者支援にとつて大事なのが障害者手帳の情報です。その情報は自治体だけが持っていますから、本来は一人ひとりの障害者を回って安否を確認するのは自治体の仕事です。ですが、職員の数が足ら



3月21日、大船渡市で給水活動に従事

ない、データが津波で流されている、などで状況がつかめていないところも多々ありましたね。

住民の身近なところに役場があつてこそ

丹羽野 行政がやらないと誰もできない仕事ですね。本当は住民にとって身近なところに役場がある方がいいのですが、「平成の大合併」で自治体規模が大きくなり、職員の数も大幅に減らされています。やはり小さくても住民の身近なところに役場がある方が、災害に強い街づくりができるのだな、と確信しました。

防災でも、復興でも後まわしになる障害者

鴨井 地震が起こると、障害者は健常者の2倍の被害を受けます。普段から防災訓練をしていても、目が見えない、耳が聞こえない、自由に歩けない障害者は、逃げ遅れて亡くなる確率が高いです。そして地震後の生活再建も。例えば岩手県の水産工場は大部分が津波で流され、産業が復興していません。作業所では、水産加工の一部を請け

負って仕事をしていたのですが、肝心の漁業が復興しないと、失業してしまいます。まずは流された船を港に戻して、養殖の施設を復旧させ、その後水産加工業が復興し、最後に作業所での仕事が始まる。かなりの時間が必要なんです。だからこそ、行政が先頭に立って産業復興の支援を行ってほしい。それと災害に強い街づくりを。今後は高台に町を作るべきだと思います。

丹羽野 自治体で働く職員の労組として、気になるのが復興事業です。阪神大震災のときのような大企業、ゼネコン中心の再開発では、地域は活性化しません。神戸の駅前にはきれいなビルが並びましたが、大手チェーン店ばかり。昔からの商店街はさびれています。東北の復興街づくり計画には、

まだまだ急がれる上下水道の復旧

松村 そうした生活復興を支えるためにも上下水道の復旧が急がれます。幸いにも今回の地震では、水道管自体の破損箇所は少なかったようです。しかし岩手では井戸水に海水が入ってしまった。海水を取り出し、水をきれいにする作業は、今、大阪市と大阪府が行っています。

被災者が元気になる支援を続けたい

松村 現時点では被災地もだいぶ落ち着いてきて、給水支援はいったん終了しています。しかし断水がまだ何万カ所も発生していますので、まだまだ復旧していません。今後も、いつ支援要請があつてもすぐに駆けつけることができるように、被災地への協力を惜しまないつもりです。地震と津波でお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々が一日も早く元気を取り戻すことができるような支援を続けていきたいです。

障害者が元気に社会参加できるように

鴨井 宮城や岩手の作業所は、海沿いにあるところが半分くらいあつて、多くがつぶれたり流されたりしています。作業所に通っていた障害者たちは、日

丹羽野 今お二人から行政の仕事の重要性が指摘されましたが、肝心の政府が、政権を巡る迷走劇を繰り返して、被災地の復興が後手後手に回っています。阪神大震災を上回る大災害なので、本来なら、もっと早く動かないとダメです。その上に原発の事故がありますから…。

住民のあいだに広がる格差と差別

鴨井 「屋内退避」などと中途半端な状態で長期間留め置かれ、そして「自主避難」でしよう？最後には「とにかく村を出ろ！」と着の身着のまま強制退去となり、体育館での避難所生活。いつ帰れるか分からない状態で、農作業もできるかどうか分からない。酪農家は牛や豚をそのままに逃げざるをえなかったし、大量の汚染水が海に放出され、漁業もどうなるか分からない。この原発事故は計り知れない被害を生じさせました。心配なのは、住民の間に広がる格差と差別です。公民館などに町ごと避難してきているのですが、地域の方々は普通の格好でやっ



地震・津波に加えて原発事故も(福島県南相馬市)

自治体が音頭をとって被災住民の意見を入れて

丹羽野 自治体で働く職員の労組として、気になるのが復興事業です。阪神大震災のときのような大企業、ゼネコン中心の再開発では、地域は活性化しません。神戸の駅前にはきれいなビルが並びましたが、大手チェーン店ばかり。昔からの商店街はさびれています。東北の復興街づくり計画には、

ぜひ自治体が音頭をとって、被災した住民たちの意見を取り入れてほしい。被災地の復興、原発で自然エネルギーの導入など、たくさんある課題を住民本位で進めていってほしいですね。私たち一人ひとりに何ができるか、何をすべきなのか。今日は、実際に被災地入りしたお二人の体験談から、貴重なヒントをいただいたと思います。どうもありがとうございます。

被災地の復興計画は被災住民に寄りそつてこそ



丹羽野 和夫さん